鶴山書院報
第13号

公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地３東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com
発行人
理事長 横尾俊彦

一念一念と重ねて一生なり

～元内閣官房副長官の座右の銘～

公益財団法人孔子の里
理事長　横尾　俊彦
（多久市長）

孔子の教えを記した書物と言えば『論語』が知られています。四書五経のひとつで、初学の者が学ぶテキストとして藩校や寺子屋などでも活かされ、広く多くの人々が学んできました。澁澤栄一翁の手記にも幼年で学んだことが記されています。

佐賀には独自の論語もあります。「鍋島論語」、「葉隠論語」の名を聞かれたことありませんか。江戸期の鍋島藩における武士の心得について、鍋島藩士・山本常朝が口述し、田代陣基（つらもと）が筆録して後世に遺ったものです。一般には『葉隠』（『葉隠聞書』とも）として、あるいは武士道の書として知られます。

武士道といえば、新渡戸稲造先生による名著『武士道』があります。そもそもは日本人が信じる教えや信条はあるのかとの問いに、熟慮して応えることになり「武士道」に注目し英文の書物に記したのです。新渡戸翁の『武士道』には武士の精神と実践を支える教えの要として「儒学」が記されています。日本人らしい、人としての信頼、自己研鑽や人格陶冶など、いわば凛とした高貴な精神性や潔癖な生き様などを説いたものです。当時、ベストセラーとなり、日本と日本人理解の貴重な書物となりました。

そのような観点で『葉隠』を改めて見つめると、佐賀人としての気概や、高貴な生き方に通じる教えがあることがわかります。

そんな『葉隠』の言葉を座右の銘とされた人物が、佐賀県出身で内閣官房副長官として5人の総理大臣を支え、最長8年7か月を務められた古川貞二郎先生です。5つの内閣で重要な政治の局面や行政課題解決に尽力されました。私も御縁に預かって、ご指導をいただけたことは有難いことでした。多久市にも来て下さり、講演を拝聴もでき、関係の皆さんとも気さくに語らいの輪を広げて下さり、あたたかく素敵な想い出になっています。

古川貞二郎先生の生き様と熱き思いは著書『霞が関半生記』（佐賀新聞社）に記されています。ご本人から直々に頂戴したのは、「一念一念と重ねて一生なり」という葉隠の一節を直筆された一冊でした。

自分以外のためにも尽くす

語れば尽きぬ教えもあります。「初めての事にはワクワクして、慣れたことにはドキドキして臨む」、「力を尽くせば必ず道は開ける」なども忘れられません。「事に臨んで悲観せず、前向きに考えて進む」助言もありました。中央官庁との対応、政府の政策確立の要諦、自治体の危機管理など、実践的なご示唆も頂戴しました。

普通の感性も大切にしつつ公務を凝視する。自らのことを先にせず公務による貢献を先に考える、誰にも知られぬ努力も厭わずコツコツ積み上げる。「志とは、自分以外のためにどれだけやったか、やろうと努力するかだ。そのことが人間を評価する基準になったら、どんなにすばらしいことだろう」とも記されています。

けれども、昨年２０２２年９月５日に急逝され不帰の人となられたことは残念でなりません。もっともっとお教えいただきたいこともありました。

その志の一端を担えるよう、努力を積み重ねていかねばと改めて自らに誓う日々です。

かつて歴代首相の施政方針演説に朱筆を入れられた碩学・安岡正篤先生は『論語』の重要性を説かれました。そんな孔子の『論語』、そして『葉隠論語』と佐賀だからこそ学べる御縁に感謝し、アフターコロナでの互いの飛翔をめざしましょう。春の陽光の輝きを待ちながら。

まだまだコロナ禍です。ご自愛ください。

石井鶴山の「北海観風草」の旅（其の四）

―日本神話ゆかりの古蹟に遊ぶ―

熊本大学　教授　中尾健一郎

佐賀藩儒・石井鶴山（一七四四―一七九〇）は、天明六年（一七八六）春、帰国に際して日本海側の街道をたどり、旅の道中に日本神話にゆかりのある土地を訪れている。特に目を引くのは、北陸と山陰における作品である。越前・若狭両国（ともに現在の福井県）では気比神宮や宇波西神社に参拝し、それぞれ「気比祠」（作品番号５３８）と「気山祠」（作品番号５４０）を作った。出雲国（現在の島根県東部）では、大己貴尊（大国主神）を祭った出雲大社にて「大社」（作品番号５６２）を詠んでいる。

鶴山は中国の古典籍のほかに『日本書紀』にも目を通していたであろうし、神話ゆかりの地、及び神々に対して、興味と関心を持って作詩したはずである。今回は、「北海観風草」に収める詩の中から、「気比祠」と「気山祠」を紹介しよう。

気比祠

角鹿に在り。北陸七十の宗社にして、大保食の神、后土（土地）を主ると云う。余、東都に在りて、一夕夢に此の祠に詣づ。今目睹する所、略ぼ同じなり。豈に偶然ならんや。

鶴栖華表依丹壑　鶴は華表に栖みて丹壑に依り
虹擁飛梁跨碧流　虹は飛梁を擁して碧流を跨ぐ
坐挹無辺澣海色　坐ろに無辺澣海の色に挹し
裳裳直欲問瀛州　裳を裳げて直ちに瀛州を問わんと欲す

（『石井鶴山先生遺稿』、作品番号５３８）

詩の題注によれば、敦賀にある気比神宮は北陸道七十社の総社であり、その祭神は、大保食神（伊奢沙別命）である。この神は五穀を生んだとされるゆえ、中国古代の農業神である后稷に擬えられている。鶴山はかつて江戸にて、気比神宮に参拝する夢を見た。そしてこのたび敦賀を訪れたところ、その有り様は夢で見たのとほぼ同じであったという。

詩の前半四句は、この内容を敷衍したものである。大保食神を祭る神殿は古代より丘の上に聳え立ち、千年以上続く祭祀は北陸道七州（若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡）の筆頭である。鶴山は江戸の佐賀藩邸で見た夢と同じ光景を、この北陸を巡る旅の道中で目にするとは思わなかったという。

詩の後半四句は、鶴山が目にした景観とその時に涌き起こった感慨を詠む。白い鶴が谷を染めんばかりに赤く映える大鳥居の上に留まり、虹のように湾曲した太鼓橋が清流の上に架けられている。太鼓橋を渡って大鳥居をくぐり、神殿に参拝した鶴山は、広大な日本海に拱手して居住まいを正し、海の彼方にあるという神仙の島・瀛州の在りかを神に問いたくなったというのである。

第一句冒頭の「歸然」は聳え立つこと。第五句の「華表」は鳥居の漢訳語で、気比の大鳥居を指す。これは広島の厳島神社、奈良の春日大社とともに、日本三大鳥居の一つに挙げられる有名なものである。第七句に見える「澣海」は、『三国志』の魏志倭人伝に見える語。対馬と壱岐の間に横たわる海のことで、鶴山の詩では日本海を指すと見られる。悠久の歴史を持つ気比神宮に参拝した鶴山は、夢中の光景を脳裡に反芻し、感慨にふけったことであろう。

越前国から若狭国に向かった鶴山は、宇波西神社に詣で、「気山祠」を詠んだ。社殿が気山村（現在の福井県三方上中郡若狭町気山）にあったためにこのように題したと見られる。詩の題注には、古代神話の山幸彦の故事と神社創立の由来が述べられている。

気山祠

彦火火出見尊（山幸彦）、兄（海幸彦）の釣鉤を失い、之れを索めて海宮に到る。井辺の桂樹の下に立てば、汲む女、延きて龍王に見えしむ。王、鱗族を召して之れに問い、終に鉤を魚の顎の中より獲たり。之れを返し、因りて龍姫を妻す。後に神、若州（若狭国）に降り、気山の里人六郎右衛門なる者、詫ぐるを受けて奉祀す。子孫見存し、世に古郎と称すと云う。

右の文の前半は、山幸彦が兄の釣り針を失い、こ

れを求めて龍宮に行く話である。龍宮を訪れた山幸彦が井戸の傍に生えた桂の木の辺りをさまよっていたところ、水を汲みにきた女性が見つけて龍王に謁見させた。龍王が眷属に釣り針の所在を問うと、魚のエラに引っかかっていることがわかったので、これを山幸彦に返し、また、娘の豊玉姫を娶らせたとされる。『日本書紀』神代巻に見える神話である。

後半は山幸彦と豊玉姫の間に生まれた神―鸕鷀草葺不合尊(1)―が若狭国に降臨し、六郎右衛門という人物に自身を祭るようにと告げたこと、六郎右衛門の子孫は今も生存し、「古郎」と呼ばれていることを記す。この故事は現在も伝えられ、六郎右衛門を継ぐ人が神職を務めて、神事を司っているという。(2)

気山村にて鶴山は、当地の言い伝えに興趣を催して次の七律を詠んだ。

憶昔天孫泛片槎
無端海上到仙家
金鉤潜影蓬丘月
玉井分妍桂樹花
偏喜鶺鴒歓若故
更憐琴瑟調無差
一従此地留神蹕
火徳于今増日華

（『石井鶴山先生遺稿』、作品番号５４０）

憶う　昔　天孫片槎を泛べ
端無くも海上に仙家に到る
金鉤　影を潜む　蓬丘の月
玉井　妍を分かつ　桂樹の花
偏えに喜ぶ　鶺鴒　歓ぶこと
故のごときを
更に憐れむ　琴瑟　調ぶること差う無きを
一たび此の地に神蹕を留めてより
火徳今に于いて日華を増す

首聯では、山幸彦が失った釣り針を求めて船に乗り、龍宮に至ったことをいう。次に頷聯に、三日月のように輝く釣り針が龍宮に隠されていること、及び井戸が桂の花と美しさを分け合っていたと詠む。頸聯はやや難解だが、山幸彦と豊玉姫が仲睦まじい夫婦となったことを「鶺鴒」「琴瑟」の語を用いて表現している。まず、伊弉諾尊と伊弉冉尊が男女の道を知らなかったが、セキレイのつがいを見て夫婦の営みを学んだ（『日本書紀』神代巻）ことを踏まえ、この夫婦神に同じく、山幸彦・豊玉姫も睦み合ったとする。そして夫婦仲の良いことを意味する「琴瑟相い和す」の成語を用い、山幸彦と豊玉姫の関係を「重ねて素晴らしい」と賞賛する。(3)二人の間に、鸕鷀草葺不合尊が生まれたことを暗示して尾聯に繋げるのである。第七句に見える「神蹕」は辞書類には見えない詩語である。天子の乗物を指す「仙蹕」の「仙」字を「神」字に入れ替えて、「天孫の乗物」の意で用い、鸕鷀草葺不合尊が当地に降臨したことを表す。最終句は、彦火々出見尊（山幸彦）から生まれた鸕鷀草葺不合尊の徳（火徳）が、陽光のように現在も盛んに輝いていると詠み収める。両者は天照大神の子孫（天孫）であるから、大神の威光が増し加わったとも読めるが、ここでは素直に気山村の人々が、宇波西神社の神事を絶やすことなく執り行っていることを、このように表現したと取りたい。

なお、近世後期の国学者・伴信友（一七七三―一八四六）は、当社について次のように記録している。

里民云う、「古昔、上瀬の神、此の民家に垂跡し、後上瀬に移る。其の日、大刀を携え、神輿に従い、故に今に至るまで毎春、其の儀を行う」と。

又た曰う、「垂跡の日、神託有りて曰く、『此の地、日向国坂山の景色に似る。因りて名づく云々』と」。（『神社私考』巻四、(4)引用箇所は原漢文）

気山村の村人は、毎春、神が（日向浦の民家に）降臨した旧暦三月八日に、社殿を移した上瀬にて神事を行っている。神は当地の景色が日向国（現在の宮崎県）の坂山に似ているので（日向と）命名したという。鶴山は、当地に降臨したという鸕鷀草葺不合尊を、村人たちが古くから崇め、神事を絶やさずにいることに、大いに感嘆したと見える。

今回取り上げた詩から看取されるように、鶴山は日本神話に関心があり、神話にゆかりのある地を訪れて、太古に思いを馳せた。儒者であっても『日本書紀』の知識も具えていること、それが彼の創作の技倆を支えたことは等閑視してはならないであろう。

【注】

(1)宇波西神社の祭神は、鸕鷀草葺不合尊とされている。稲庭正義輯著、伴信友修補『若狭国志』（谷口書店、一九三三年）巻四、三方郡・神廟、一三頁を参照。

(2)杉原丈夫編『越前若狭の伝説』（松見文庫、一九七〇年）七三五頁、七五三～七五四頁を参照。

(3)「憐」は「あわれむ」と読むが、唐・白居易が楊貴妃一門の栄華を「長恨歌」に、「姉妹弟兄皆な土を列ね、憐れむべし光彩門戸に生ずるを」と詠むように、肯定的に用いることがある。

(4)『伴信友全集』第二巻（国書刊行会、一九〇七年）所収『神社私考』巻四、「若狭国官社私考下」一二七頁。

「旧高取邸」と高取伊好

松浦史談会　田島　龍太

はじめに

平成十年（一九九八）十二月二十五日に唐津市北城内にある「旧高取家住宅」は、国の重要文化財に指定された。この建物の保存には、思いもかけない幸運があった。この五年前、住宅の当主であった高取紀子氏と令嬢日出子氏は、台風被害によって病身の老体となった建物に対する最後の鎮魂の思いを込めて写真集を作られた。この写真集が多くの人を動かし、保存という道を作ったのである。建物保存の文化財担当となった私は、平成十三年（二〇〇一）に「月刊文化財」に「・・この「屋敷とここに暮らした人々」に捧げられた写真集の一枚一枚が、頁を捲った多くの人々の心に、失われていくものへの愛惜と、何よりも、歳月の重みだけではない人の精神の重厚さを秘めた物質の輝きを感じさせたようである。それは、建造物という形での高取伊好の精神であり、唐津の過ぎた時代の華やぎでもあったようである。」と記した。十年余の保存事業に関わった今もその思いは変わらない。

一「旧高取家住宅」を保存する

平成六年（一九九四）から始まる佐賀県近代和風建築総合調査によって、県内の当該期の建物の調査により、「旧高取家住宅」が改めて評価されることになった。文化財建造物のカテゴリーの広がりが、世界遺産への登録に対する基盤づくりであったとしても、近代建築物の再評価は西日本地域の近代産業遺産の意識を高めることとなり、その位置づけとしても「旧高取家住宅」は屈指の指定候補となり、平成八年（一九九六）には「高取家住宅主屋(附)庭園内置物・陶製置物」として佐賀県重要文化財に指定された。翌九年には緊急に台風被害のあった屋根の修理を行い、唐津市においても近代和風建築等保存検討委員会や旧高取家住宅保存・活用懇話会が設置されるなど、官民一体となった保存気運が高まった。国の重要文化財の指定はその動きに連動するかに進み、平成十一年（一九九九）には、保存管理計画が策定され、平成十三～十七年（二〇〇一～二〇〇五）には保存修理のための旧高取家住宅・城内公園整備事業が行われた。

二 高取伊好と唐津

高取伊好の履歴については多くの研究者の資料にあり、多久郷土研究会の『丹邱の里』十一号「特集高取伊好」（一九九七）に詳しいので、ここでは、唐津との関係、どうして唐津に私邸を立てたかを考えてみる。嘉永三年（一八五〇）に多久藩の漢学者の家系鶴田家の三男に生まれた伊好は、明治五年（一八七二）工部省鉱山寮で鉱山学を学び、卒業後は官営高島炭鉱に入り、石炭産業に身を置くことになる。ここで、大隈重信や旧土佐藩の後藤象二郎、岩崎弥太郎、竹内綱などとの知遇を得る。明治十五年（一八八二）高島炭鉱の民営化にともない独立して、旧唐津藩内の北波多の芳谷で炭坑の開墾に着手する。唐津とのかかわりは此処に始まる。明治二十七年（一八九四）には相知炭坑に着手し、翌年には唐津炭業組合長になり、明治三十三年（一九〇〇）には佐賀

高取伊好略歴と「旧高取邸」

西暦	年号	年齢	出来事	炭鉱関係	建物関係	備考
1885	M.18	36	伊好独立	芳谷炭鉱開発着手		
1888	M.21	39	(長兄　鶴田 晧逝去)			
1889	M.22	40		唐津港特別輸出港に指定		
1894	M.27	45	伊好取締役就任	芳谷炭鉱株式会社組織		日清戦争
1895	M.28	46	唐津鉱業組合長就任			
1896	M.29	47		相知炭坑開削		
1898	M.31	49	(次兄横尾庸夫逝去)		武雄　在か	
1899	M.32	50		相知炭坑開削、 唐津興業鉄道株主		
1900	M.33	51		相知炭坑三菱に譲渡		
1901	M.34	52	(義捐・寄附・喜捨始める)	赤坂口・福母炭鉱買収		
1903	M.36	54		赤坂口・福母産炭、 内国博覧会第二等	旧高取邸墨書	
1904	M.37	55				日露戦争
1905	M.38	56	旧高取邸落成記念能	芳谷炭鉱、竹内綱に譲渡	大広間棟完成	
1909	M.42	60		杵島炭鉱全体買収 (第一、二坑)		
1912	M.45	63	緑綬褒章　賜受		茶室増設	
1913	T. 2	64	肥前電気鉄道会社社長 就任		大隈侯来邸	第一次大戦
1917	T. 6	68	高取合資会社設立			
1918	T. 7	69	高取鉱業株式会社設立		居室棟増設	
1919	T.8	70	肥前電気鉄道社長を 盛氏へ	高取鉱業株式会社、高取 合資会社代表を辞す		
1920	T.9	71	西渓公園内、寿像設置			
1921	T.10	72	九州巡遊旅 (5月7日～5月24日)		小濱に仙山荘	
1922	T.11	73	彰徳碑設置(唐津町)			
1923	T.12	74				関東大震災
1924	T.13	75	朝香宮鳩彦殿下御来臨			
1927	S. 2	77	逝去(1月7日)	「開物斎成務伊好居士」		
1930	S. 5				土蔵、仏間建築	
1962	S.37				居室棟改修	
1971	S.46				洋間改修	
1996	H. 8		佐賀県重要文化財指定			
1998	H.10		唐津市に寄贈 国重要文化財指定			
2002	H.14		修理工事着手			
2005	H.17		修理工事竣工			
2007	H.19		建物公開開始			

※炭鉱の閉山　杵島炭鉱　1969(S.44) / 杵島炭鉱大鶴鉱業所1957(S.32)「にあんちゃん」
三菱端島炭鉱　1974(S.47) / 三菱高島炭鉱　1986(S.61)
明治佐賀　1974(S.47) 佐賀県の炭鉱消滅 / 池島炭鉱　2001(H.9) 九州炭鉱消滅

県石炭同業組合長に就任して、佐賀県の押しも押される石炭産業界の第一人者に推挙されるのである。その五年後の明治三十八年（一九〇五）に唐津西の濱に本宅（旧高取家住宅）を構えることになる。以後、杵島炭鉱の経営開始、そして大正七年（一九一八）高島鉱業株式会社設立の翌年に引退し、昭和二年（一九二七）年に、七十七歳で逝去、唐津市神田の御山（地元では高取山と呼ぶ）の墓所に永眠する。

三「旧高取家住宅」の価値とは

近代和風建築物としての「旧高取家住宅」は、大きく四つの要素を評価されたものである。一つ目は、建物の歴史的構成の魅力である。所謂、近代和風と呼ばれる明治期の和風建築物は、近世以来の数寄屋造の木造建築物の技術的な頂点にあるものであり、かつ近代という西洋建築物の波をいち早く体現したものである。明治三十七年（一九〇四）の竣工以来、昭和初期に現存する建物構成が出来上がる三期にわたる増築などは時代的変遷をよく示すものである。二つ目は、建物に残された生活様式である。書斎、応接室、浴室、台所と付属棟である土蔵、食糧倉庫、家族、使用人湯殿等の明治末年から昭和初期の邸宅生活の一端を垣間見せるものである。三つ目は、建物全体の美術的意匠である。建物の随所に見える意匠、特に建具、欄間、照明器具等の技術やデザイン性は飛びぬけて優れたものであり、二十六種七十枚余に及ぶ杉戸絵等の構成は美術史的価値も有している。最後の四つ目こそが、旧高取家住宅の特徴として特筆されるものであり、生活様式に組み込まれた伝統芸能である茶室、能楽堂の存在である。明治三十八年（一九〇五）八月に新築祝いとして開催された観能会は、その時代と建物建築の意義をも示すものであった。

「蘭亭曲水図」唐津市教育委員会提供

四「旧高取邸」と高取伊好

日本の近代化を支えたのは石炭産業の隆盛にあった。富国強兵、殖産興業の旗は蒸気機関の発展の元に振られ、それを支えたのは燃料としての石炭であった。唐津地方をはじめとする西北九州における石炭開発は、その意味で近代化の先駆けであった。幕末に全国の出炭量の三分の一を占めた唐津炭田は近代における佐賀県・東松浦郡の石炭産業を推進し、大手財閥や地域資本を誘引し続けた。高取伊好は、高島炭鉱、芳谷炭坑以来、三菱との関係を強く持ち三菱の九州進出の拠点づくりにも貢献した。明治四十五年（一九一二）の西唐津港への旧三菱合資会社唐津支店の建設もその一つである。鉄道や道路、橋などの多くのインフラ整備もこの時期に始まる。しかし、大戦景気の大正中頃をピークとして、唐津炭田の出炭は低下し、昭和十年代の後半の戦時景気を最後に、戦後は燃料の石油燃料への置換による衰微は昭和四十年代の炭鉱閉山の波の引き金となり、その後、九州から石炭産業の火が消えていくことになる。

高取伊好の人生は、決して後にいわれる炭坑王と呼ばれる幸運に満ちたものではない。伊好が芳谷炭坑に着手したのが四十五歳、杵島炭鉱に進出したのが五十二歳、高取合資会社を設立したのが六十八歳、高取鉱業株式会社を設立したのが六十九歳である。七十七年の生涯の後半期にあたる。しかも、その後半期こそ、伊好の義捐・寄附・喜捨という社会貢献の時期である。高取家住宅の建物としての三期にわたる沿革は、それぞれの画期と符合している。しかし、それは財力を誇示するものではなく、来客を招きそして饗応慰労の場所としての意味があったと考えられる。伊好の座右目銘は「労而後休常食其額汗」であった。「開物成務」を人生の目標とした伊好は唐津の神田山に眠るが、唐津城下には旧唐津藩最後の藩主小笠原長行の長子長生の揮毫による「徳澤如海」の高さ七メートルの石碑が残され、その徳が敬愛されている。

唐津の旧高取家住宅（現在施設名「旧高取邸」）には、多くの杉戸絵が残されているが、能舞台が仕組まれている大広間棟一階の総長四・九メートルに及ぶ建物最大の四枚の黒漆框の杉戸には、「蘭亭曲水の宴」の画題が選ばれている。王羲之の有名な、浙江省紹興にあった蘭亭での文人達の酒宴の絵である。庭園の流れに杯を浮かべて、それが流れ来る間に歌を詠むという、奈良時代に日本に伝わる曲水の宴である。大広間棟の三十畳の空間は、そうした理想の宴の為ものであり、そのための能楽舞台、能楽堂でもあった。居住空間の居室棟から接客饗宴の為の大広間棟の入り口にある杉戸絵狂言「福の神」の謂は、幸せになる秘訣の伝授であった。それは、「勤勉で優しく、来客を喜び、夫婦仲を円満にし、福の神に酒を供えること」という。そこには、伊好翁の労に汗を流し成務の後に飲む楽しみの酒があったのではないかと「福の神」の高笑いの聞こえてきそうな杉戸の絵に思う。

「旧高取邸」は、そうした翁の精神が色濃く残る屋敷である。

草場佩川と鹿島～文事が繋ぐ交流～

鹿島市民図書館学芸部　高橋　研一

鹿島藩の藩校と多久

近世に鹿島を統治した鹿島藩は、小城・蓮池とならぶ佐賀藩の支藩である。文事振興に意を注ぎ、歴代藩主が蒐集・継承してきた中川文庫は全国屈指の大名文庫として知られている。

鹿島藩は天明年間（一七八一～一七八九）に藩校を創設し、藩士の教育に乗り出した。創設当時の藩校の名称は「学館」であり、のち万延元年（一八六〇）に弘文館と改められた。草創期の藩校を支えたのが多久から招聘された相浦五平太・石橋平蔵・西鼓岳であった。

相浦五平太は多久家家臣相浦宗慶の三男として生まれる。罪を犯して、多久を追放され、天明七年には鹿島に移り、「鹿島街中」の童児を集めて、読書指南や講談を行い、生計を立てていた。この評判を聞いた鹿島藩八代藩主鍋島直宜は五平太を学館の教官に招き、すべての藩士に講義を受けるよう命じた。さらに、寛政十三年（一八〇一）に九代藩主直彛の文学師範に任じられ、藩主の教育にあたるなど、鹿島藩から厚い信頼を得た（『鍋島直彛と鹿島の蔵書文化』）。草場佩川も五平太と交流があり、たびたび鹿島にある五平太の屋敷を訪れている。

五平太の跡を受けたのが石橋平蔵である。平蔵は享和三年（一八〇三）に多久家家臣相浦宗俊の子として生まれ、五平太は叔父にあたる。その後、多久家家臣後藤家の養子となり、多久の東原庠舎や日田の咸宜園で学んだ。鹿島藩士石橋家の養子に招かれ、文教を担い、学館の学頭にまでなっている。嘉永元年（一八四八）には十三代藩主直彛の師範となり、五平太と同じく藩主の教育を委ねられている。また、平蔵も佩川との交流が深く、たびたび佩川の日記や漢詩文に登場している（『鹿島文学』）。

西鼓岳は享和三年に多久家家臣西忠能の四男として生まれる。姉佐与（仁志）が佩川に嫁ぎ、鼓岳は佩川の義弟にあたる。鹿島藩主によって、藩校学館に招聘され、鹿島藩士の教育にあたっている。

このように、草創期の鹿島藩の藩校は多久の人達によって担われており、より高い水準の学問を求めて、教授陣の故郷である多久に遊学する鹿島藩士が現れるようになる。こうした鹿島から遊学した人達を多久で受け入れたのが草場佩川である。

草場佩川と高松世梁

文政四年（一八二一）、東原庠舎教授の地位にあった三十五歳の佩川のもとを、五平太の書を携えた鹿島藩士が訪ねてきた。その藩士の名は高松泰助で、詩学を学ぶため、佩川のもとを訪れたのである。五平太の書は紹介状であろう。この泰助が佩川のもとに遊学した最初の鹿島藩士である。佩川は泰助の才能と意欲を愛で、文政四年八月には「信甫」、十月には「世梁」の名を与えている。世梁は佩川にたびたび漢詩の批評を乞うなど、親密な交流を続ける。文政六年六月には、佩川は世梁の招きに応じ、浜にある世梁の屋敷を訪れ、「高松氏楼記」を記している（『草場珮川日記』）。

こうした佩川と世梁の交流は単なる両者間の交流にとどまらず、鹿島に新しい文事の動きをもたらした。それが鹿島の漢詩文人結社である「鹿島詩社」の結成である。

天保九年（一八三八）、佩川は鹿島詩社が覚鑁（新義真言宗の開祖）ゆかりの岩屋山で詠んだ漢詩（「窟山游艸」）を批評している（「一枝喚春」）。また翌天保十年には、「鹿島詩社諸草五十余首」を批評し、世梁と山田喜左衛門に返却している（『草場珮川日記』）。

このことから、「鹿島詩社」の中心人物が世梁であり、佩川の指導のもとで活動していることを読み取ることができる。

それまでの鹿島藩の漢詩文人達は鹿島藩主を中心とした文化サロン（和歌・漢詩・俳諧）に位置づけられていた。佩川と世梁の師弟関係によって、鹿島に他の文学から独立した漢詩文人だけの結社である「鹿島詩社」が新たに成立したのである。

草場佩川と鹿島

佩川は鹿島藩の藩校で教授にあたる五平太・平蔵、あるいは鹿島から遊学した門弟に招かれるなどして、鹿島に訪れる機会がたびたびあった。

こうした佩川と鹿島の関係をより緊密化したのが多良海道である。多良海道は長崎街道の脇往還であり、多良海道の宿場町である浜宿は多良海道を通る文化人の宿泊・逗留の場として栄えた。

佩川は、たびたび諫早家の郷校好古館に招かれ、多久（あるいは佐賀）と諫早を往来している。陸路の場合は、多良海道を通り、当初は宿場町である浜宿に宿泊していた。佩川が逗留する場所には、かつての門弟達や漢詩文人が集まり、鹿島藩を介さない私的な文化交流が繰り広げられた。宿場町であるからこそ成り立つ逗留の文化交流といえる。

浜宿逗留中に詠んだ佩川の漢詩は、浜地区の臥竜ヶ岡公園に建つ歌碑に刻まれている。この歌碑は大正五年（一九一六）に大正天皇即位記念として、浜町有志によって建てられたものである。

佩川の場合、豊富な詞書を伴う膨大な漢詩文が遺されており、鹿島における佩川の常宿の変遷をたどることができる。

当初、佩川が常宿としたのが浜宿にある高松世梁の屋敷である。世梁は先述の通り、佩川にいち早く師事した「鹿島詩社」の中心人物である。

安政年間（一八五四～一八六〇）になると、多良海道に面した中川にある森田半助（二代目）宅を常宿とするようになる。森田家は文政年間（一八一八～一八三〇）に初代半助が長崎で膏薬製造を学び、「唐人膏」を販売して以来、製薬を営んでいた。二代目半助が嘉永七年（一八五四）十月に佩川を訪ねたのが交流の始まりである（『草場珮川日記』）。半助は佩川をもてなすため、屋敷内に中川を望む楼閣を建てて、安政四年に佩川は得月楼と命名している。

文久二年（一八六二）に佩川の子船山と吉田能久の娘添が婚姻すると、佩川は常宿を吉田宅に替える（「文久癸亥宜斎餘事」）。吉田家は鹿島本町で本陣を営んでいた。文久四年には能久の求めに応じて、吉田家の邸宅を孝梅軒と命名している（「文久四年世間甲子」）。

篤誠院と佩川・船山

先述の船山と添の婚姻を強力に推し進めたのが、九代藩主直彝の夫人である篤誠院（篤子、柏岡）である。紙面の制約上、篤誠院の詳細は『〈再発見〉鹿島の明治維新史』（鹿島市、二〇一八年）を参照いただきたい。

篤誠院は佐賀藩による鹿島廃藩を撤回に追い込むなど、鹿島藩を実質的に主導する存在であった。廃藩の危機を乗り越えた篤誠院は、二度と廃藩の危険にさらされない強力な鹿島藩を築くため、藩主・藩士、そして家庭で藩士を支える女性達の教育に乗り出した。

女中として仕える鹿島藩の妻や娘に、学問・和歌・裁縫・作法・長刀などを身につけさせるなど、文武両道にわたる教育を徹底して行った。そして、育て上げた女性達は、篤誠院の差配によって、鹿島藩内外に嫁ぎ、鹿島藩を支える広域なネットワークが作り出されたのである。

船山と添の場合、添は実家の吉田家が篤誠院の家政機関の役割を担っていたこともあってか、女中として篤誠院に仕えている。添はのち「西肥女房百歌撰」に撰ばれたほどの歌人であり、篤誠院の薫陶によるものであろう。船山は婚姻当日の日記に、「但徳性院様御侍女、万端御同人様ゟ之御心遣」と記している（『草場船山日記』）。すなわち、この婚姻はすべて篤誠院の取り計らいであったのである。

また、篤誠院は藩士やその妻女に勧農の重要性を教育するため、毎年八月に居宅である柏岡内の貧楽亭で稲の花を愛でる宴を催した。この宴で献じられた詩文（和歌・漢詩文・俳諧）を編纂したのが「富草集」である。嘉永四年（一八五一）から明治九年（一八七六）までの二十六年間のうち、二十四年分が現存している。詩文を献じたのは、鹿島藩だけでなく、佐賀藩・小城藩や多久・武雄・伊万里などの人達も多数含まれており、こうした文事の営みの中から、篤誠院は鹿島藩を支えるに足る人材を藩内外から見出していったのである。

なお、藩士にとって藩校に通学する負担は重く、女性は入学することさえ許されない時代、家庭での親（特に母親）からの教育が人間形成を決定づける。現在も鹿島で明君と慕われる直彝の活躍を支えたのは、篤誠院の薫陶を受けた女性が育てた子供達（田中鐵三郎や田澤義鋪など）であることを附言しておきたい。

篤誠院と多久擁子

篤誠院と多久の関わりで注目される女性が多久擁子である。擁子は天保六年（一八三五）に須古鍋島茂真の長女として生まれ、天保十五年に多久茂族と婚約する。和歌を嗜み、歌稿類が残るとされる（『多久市史人物編』）。

擁子の父茂真に天保十二年に後妻として嫁いできたのが篤誠院の一人娘季子である。そのため、篤誠院は擁子の義理の祖母にあたるのである。こうした関係からか、擁子は安政五年以降、稲花の宴に和歌を献じている。

慶応四年（一八六八）に篤誠院の七十歳を祝した「柏岡太夫人七十賀祝獻詩歌」が編纂される。佐賀諸藩の有力者が賀詩を寄せた大部な歌集である。この書物は鹿島鍋島家には伝来せず、擁子所持本と考えられる写本が多久家文書にのみ伝来している。和歌の巻頭には擁子の和歌が据えられていることから、この祝賀集の編纂は擁子の企図による可能性が高いと考えられる。

このように鹿島藩の文事・文教の展開の中で、多久の影響はきわめて大きい。いうまでもなく地域は自律的に発展するのではなく、他地域と相互に影響し合い、共生的に発展していくものである。こうした観点から藩政期の佐賀の歴史や文化を見直していく際、多久市郷土資料館が所蔵する草場家資料は限りない可能性を秘めているのである。

多久家文書
『水江事略』（翻刻文）紹介 11
公益財団法人 孔子の里 理事 服部政昭

水江事略巻之五

長信公譜之四

文禄元年壬辰ヨリ
慶長十八年癸丑ニ至ル

文禄元年壬辰　長信公御年五十五

正月名護耶ノ普請場ニ於テ加藤清正ノ臣加藤熊之助カ人夫ト久重カ人夫喧嘩ヲ仕出シ互ニ打擲ニ及フ果ハ熊之助ト久重ト抜合スヘキ形勢ナリ時ニ久重カ附役梶原喜兵衛人夫ニ紛レ込ミ忍寄テ杖ヲ以テ不意ニ熊之助ヲ打倒シ直ニ其場ヲ逐電ス諸手挙テ其智勇ヲ歎称スト云々

殿下二十萬ノ兵ヲ発シテ朝鮮ヲ伐ツ

五月殿下名護屋ニ御下著有

六月慶闇尼御使ヲ名護屋ニ遣シ酒肴ヲ献セラレ御下向ヲ祝セラル殿下是ヲ謝セシ文ニ云

見まひとして三しゅ三荷到来よろこひ思召候猶かうさうす可申候也
六月七日　御朱印
けいきん

十二月慶闇尼御使ヲ名護屋ニ遣ハサレ歳末ヲ祝セラル酒肴並精米ト鶏ヲ献セラル殿下殊ノ外御感有テ仰セラル、ハ抑米ハ人命ノ根元ニシテ最尊ムヘキモノナリ又鶏ハ時ヲ告ル瑞鳥ニシテ殊ニ陣中ニ用ユベキモノナリ且我雞林ヲ征スルニ當リテ先是ヲ得タリ彼尼吉瑞ヲ我ニ示ス甚珍重ナリトテ状ヲ賜テ是ヲ謝セラル御使ハ金持舎人助ナリ

としのくれの祝義として三色三かたうらいことにねんを入候段よろこひ思しめし候いく久しくあいかハらすといわい候一つかひ何より〳〵しあいに思しめし候くハしくかにさうす申まいらせ候也
十二月十七日　御朱印
けいきん〻

同二年癸巳　長信公御年五十六

正月九州諸大名ノ老若附庸ノ隠居迄名護屋ニ到リ年始ノ御禮ヲ遂ク政家公及我公龍造寺安房守信周モ又然リ慶闇尼ヨリハ例ノ金持舎人ヲ御使トシテ年始ヲ賀セラレ酒肴ヲ献セラル殿下御文ヲ賜リテ是ヲ謝セラル

あらたまりぬるとしの祝義として三カ三しゅよろこひおほしめされ候なをかうさうすかたより申まいらせ候　已上
正月廿二日　御朱印
けいきん

二月慶闇尼御見舞トシテ御使並種々ノ土産ヲ進セラル殿下文書ヲ賜ハル

見まひとしてくれない三きんそのほかもくろくのこと〳〵いろ〳〵こんしのほとよろこひ思しめされハ候なをかうさうしかたより申候也　かしく
二月十八日　御朱印
けいきん

殿下九州大小名ノ妻娘ヲ名護屋ニ召サル誰々モ大ニ是ヲ迷或ス我公ハ此難題ヲ避ラレン為家久公ノ御室ヲ具セラレ御上洛アリト云々

又名護屋陣中ノ奴樸ノ輩偽テ奉行頭人ノ下知ト唱ヘ近國諸郷ニ徘徊シテ人民ヲ掠メ財物ヲ押取ス諸民居所ヲ安セス山林ニ逃隠レ農事ヲ勤ルニヨシナク田モ畑モ荒果ンス有様ナリ當地ノ臣等相謀テ名護屋ニ訴フ殿下大ニ怒リ玉ヒ早速三奉行ニ命セラレ是ヲ制禁セラル時ニ奉行中ヨリ當領ノ代官飯盛善右衛門尉ニ下知ヲ下ス其状ニ云

當村地下人諸役令迷惑逐電之由其聞候早々立帰耕作已下可入精候公儀御用於有之ハ両三人得御諚以黒附可申遣候其外誰々人足以下雖申付候一切罷出間敷候若押而申懸候族於有之ハ可注連候此上不立帰百姓於有之ハ其者之事ハ不及申相抱候在所共々可被加御成敗候此旨百姓共〻申聞早々可召返候於油断可為曲事候也
六月十三日　長束大蔵太助　正家　判
石田木頭　正澄　判
寺澤志摩守　正成　判
多久之肝煎　飯盛善右衛門

今年波多参河守親改易佐竹義宣ニ預ケラレ出羽の國ニ赴ク居城貴志岳及領地ハ直茂公ヘ預ケラル

同三年甲午　長信公御年五十七

家久公朝鮮御在陣ナリ日本ト大明和平ニ依テ朝鮮八道暫ク平均ニ属ス日本ノ諸軍河南河北ニ移リ居ル數年ノ在陣殊ニハ風土ノ異ナルニ依テ諸勢甚困究シ病ヲ受テ死スル者多シ殿下是ヲ憐ミ玉ヒ釜山浦城番諸将ノ外皆歸朝ヲ命セラル中歸朝ト称スル是ナリ

同四年乙未　長信公御年五十八

家久公多久城御在城

八月芳岩夫人山口村圓昭寺ニ於テ一千部ノ法華經全讀結願ス

慶長元年丙申　　長信公御年五十九
諸将再ヒ朝鮮ニ渡海ス
十月二十日勝茂公（**時ニ御年十七**）初テ朝鮮ニ御渡海有
十二月五日家久公士卒ヲ率ヒテ伊萬里ヨリ船ヲ発シ再ヒ朝鮮ニ御渡海アリ

同三年戊戌　　長信公御年六十一
八月十八日殿下秀吉公伏見ニ於テ薨去御遺言ニ依テ朝鮮在陣ノ諸将皆歸朝ス冬十二月ナリ諸将直ニ大坂ニ登ル

同四年己亥　　長信公御年六十二
九月我公高野大明神（**下多久ニ在**）若宮八幡宮（**上多久ニアリ**）両社ノ神前ニ於テ猿楽ヲ興業セラル神慮ヲ涼メンカ為ナリトソ新庄（**村ニ樂人ノ黨アリ美麗ト称ス**）ノ美麗ヲシテ樂ヲ成サシム二十日高野社二十一日ハ若宮社ナリ是ヨリ永ク恒例ト成テ毎年欠ル事ナシ且下津留ノ田壱町三反（**大日免ト云**）ヲ以テ若宮社ニ寄附セラル皆御心願成就ノ御為ナリトソ
初家久公朝鮮御出陣ノ時我公御心願ヲ立ラレ神明擁護ノ威力ヲ以テ武功ヲ異邦ニ輝カサレ目出度御歸朝有ヘキ様トノ思召ナリ萩野村ノ米三石ヲ美麗ニ與ヘラル、事此時ヨリノ事ナリ（**折紙ノ真中ニ随分ト書ク**）

同五年庚子　　長信公御年六十三
三月朔日母公慶闇尼水江ノ東の舘ニテ御卒去御齢九十二鹿子流長院ニ葬ル引導ハ文應和尚慶闇妙意大姉ト謚ス故ニ流長院ヲ改テ般若山慶闇寺ト号ス（**開山大用二世一翁三世文應**）
八月公槙鹿子ノ田地五町ヲ寄附セラル文應書ヲ奉テ是ヲ謝ス今傳ル所ノ寺領是ナリ
抑慶闇寺ハ大用禪師ノ隠居セシ所ニシテ些キ菴室ナリシニ今ハ長州ノ大寧寺ノ末ニシテ寺門大ニ繁榮シ當州ノ五ケ寺ニ列ス國家三分地ヲ収ルニ至テ我水江家ノ所領與賀河副ノ村々モ又出分ト成ル鹿子村モ御蔵入ナリシカ共慶闇寺領ニ於テハ相違ナシ是慶闇夫人ハ隆信公及我公ノ御母ニシテ且直茂公ノ御養母國家ノ御尊敬浅カラサルニ依テナリ慶闇夫人ノ私領ノ地木原竹藤（**佐嘉郡**）矢俣小楠（**神埼郡**）江里山初田ケ里（**小城郡**）焼米（**杵嶋郡**）一千餘石ナリ是ヲ我公ニ讓リ與ヘラル
今年夏秋ノ比上方兵乱起ル家久公（**時ニ龍造寺與兵衛ト申**）上方ニ在テ御軍役ヲ勤メラル七月伏見ノ城攻八月伊勢御陣皆御勲功有九月関ケ原合戦西方没落十月太守勝茂公立花御征伐ノ命ヲ受テ御歸國ナリ家久公御供同二十日柳川合戦八院ニ於テ味方大ニ勝利ヲ得タリ直ニ薩摩御発向佐志岐ニ陣セラル冬ニ至テ御歸陣ナリ

同六年辛丑　　長信公御年六十四
二月公武藤ノ御別荘ヲ轉セラレ一寺ト成サレ本尊ヲ安置セラル高傳寺ノ珍翁和尚ニ御相談有テ岩松軒ト号セラル又妙經一千部ノ讀誦修行セラル抑此竹藤ノ別荘ハ水江ノ砦ナリシ由
初材菴和尚ヲ請シ暫ク爰ニ居ラシメ後慶闇寺四世禪室和尚爰ニ隠居シ材菴代テ慶闇寺ニ住シ五世ノ法嗣タリ

同十年丁未　　長信公御年六十八
芳岩夫人岩松軒ニ託シテ妙典一千部ヲ修讀セラレ石塔ヲ建ラル且御夫婦ノ御位牌ヲ黨院ニ安置セラル

同十二年丁未　　長信公御年七十
十二月上旬竹藤ノ普門院ニテ法問有御聴聞ノ為直茂公御入来我公岩松軒ニ於テ御饗應リ直茂公ニ仰セラル、ハ我別荘ヲ轉シテ永ク寂滅場トナサンハ如何アラン公曰可ナリ我亦多布施ノ舘ヲ以テ斯ノ如クセン宗智寺ノ起リ是ナリ

同十八年癸丑　　長信御年七十六
十月二十六日多久城ニ於テ御卒去天理元心山主ト号シ二十七日専禰寺ニ於テ御火葬殉死ノ者四人石田軍兵衛尉土橋式部少輔早田杢左衛門入道長榮江副十郎左衛門入道意順ナリ軍兵衛ハ御卒去ト聞テ其儘自殺式部ハ土橋ニ在テ是ヲ聞早速陣ノ尾ノ上山ニ攀上リ多久城ニ打向ヒ刀ヲ抜キ咽ヲ刎テ死ス意順ハ御火葬場ニ至リ自殺ス其樸五郎左衛門ト云モノ意順ト共ニ死ス早田ハ此比ハ公ノ家務ヲ司ル故ニ水江ニ到リ諸用ヲ書置シ二十七日晩景多久ニ歸リ天ヶ瀬ニ於テ切腹ス武冨助左衛門介錯ナリ二十八日御遺骨ヲ慶闇寺ニ納メ御葬送アリ殉死五人ノ骨モ同寺ニ納ム中陰ノ法事ヲ修ムル三日引導者ハ村菴和尚ナリ夫人御飾ヲ落サレ芳岩ト号セラル
公ノ御代御家政ヲ執ルモノ
初ハ石井藤兵衛尉（**後尾張ト改ム**）村山内蔵助（**後常陸ト改ム**）西岡慶賀齋（**丹後入道**）鷲崎主殿允（**後縫殿ト改ム**）水江家ノ四人ト称スルハ是ナリ
中比石井大隅守（**尾張守ノ嫡子**）村山常陸介西岡丹後入道鷲崎縫殿助都テ七人ノ内三人ハ詳ナラス
後　南里三郎左衛門尉（**南里隼人助嫡子**）吉岡式部左衛門尉（**吉岡玄蕃允子ナリ　初造酒正　後平左エ門**）

（以下　次号に続く）

聖廟資料49「覚」にみる多久聖廟落成と孔子像の遷座前夜（其の一）

多久市郷土資料館学芸員　山口佐和子

多久市郷土資料館には、多久聖廟に関する資料群『聖廟資料』が所蔵されている。文書や図面、楽器などの器物も含めて、百十三点の資料がある。今回はその中から、孔子像の遷座に関する記述がある、『聖廟資料』49「覚」を中心に、多久家資料『御屋形日記』などからも多久聖廟の建造に関わる資料を見ていき、聖廟への孔子像の遷座までの詳細を確認したいと思う。

＊近世の資料では「聖堂」の呼称の使用が散見され、明治四十二年に提出された調書では「多久聖廟」の名称が使われている。ここでは資料引用以外の呼称を「聖廟」に統一する。

さて、多久聖廟建立までの道のりは広く知られるところであるが、概要をみてみよう。多久聖廟が建立される前段階として、多久領の邑校東原庠舎の設立がある。孔子廟（聖廟）と学問所は切り離せないものであった。元禄五年（一六九二）三月、多久四代領主多久茂文に実兄の鍋島綱茂から、かねてより約束していた「学問所」の扁額が贈られた。茂文は多久李允（多久安成）を学問所の心遣い（責任者）とし、川浪自安を儒者として起用して、東原庠舎初代教授とした。自安は三代多久領主多久茂矩に医者として召し抱えられ、儒学にも通じていた。また、この時茂文は清国から孔子像と四配の像を取り寄せており、この孔子像は現在白木聖廟に祀られている。元禄十年（一六九七）十二月には自安の自宅兼学問所の作事方がすでに命じられており、元禄十二年（一六九九）十二月までには学問所が完成している。元禄十三年（一七〇〇）茂文が京都の儒者中村惕斎に孔子像の鋳造を依頼し、翌十四年（一七〇一）六月二十一日にはそれを納める「しつらい所」が自安宅兼学問所に出来たことを佐賀屋敷に報告している。

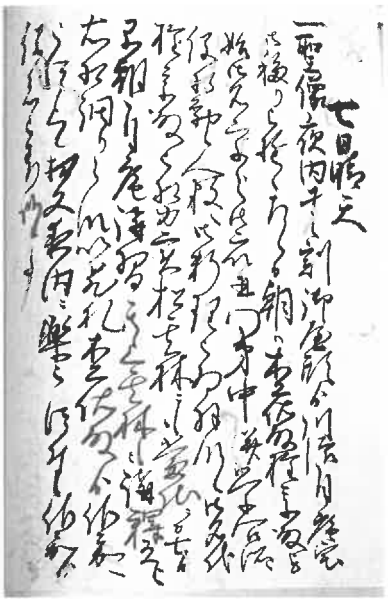
「御屋形日記」元禄十四年九月三日の条

一、佐嘉より聖像當所御越ニ付而、為御迎中薗甚之允、并与より壱人御輿舁夫八人夜内より佐嘉罷下候、左候而晩景ニ御屋形御入被成候、川浪自庵、鶴田十兵衛、石井太郎右衛門扨又鶴田郷右衛門儀存為御番罷出居被申候事

「御屋形日記」元禄十四年九月七日の条

一、聖像夜内丑之刻御屋形より川浪自庵宅へ御移り被遊候、左候而、朝八李佑殿権兵衛殿を始御名字之御衆并門弟中并学問所へ役持勤候人数へ御料理被拝領候、御名代権兵衛殿被相力、実松玄林ニも當所ニ而七日早朝自庵講習、其上玄林も講釈有之、右相調り候処、以飛札李佑殿ゟ佐嘉へ被仰上候、扨又夜内ニ楽被　仰付候、佐嘉より役者被差越候事

九月三日に佐賀から多久の御屋形へ御輿に担がれ移された孔子像は、七日の夜に東の原にある自安宅へ遷座された。祭儀の執り行いは丑の刻に始め辰の刻に終わると決まっている。朝には学問所の責任者である李佑（多久安成）や茂文の名代である多久家家老多久権兵衛をはじめとして学問所の関係者に料理が振る舞われた。早朝には自安と実松玄林による講習・講釈が行われ、夜には佐賀から来た役者による楽の演奏も行われた。この時の遷座の様子は関係者だけの集まりという感じである。茂文は孔子像の遷座を大いに喜ぶとともに聖廟建設の必要性を強く感じ、『文廟記』にその思いを記した。



「御屋形日記」元禄十四年九月七日の条

同年五月より聖廟建設のための敷地造成は始まっており、翌十五年の八月には多久孫三郎が責任者に任命されている。聖廟資料42「宝永二年乙酉十月廿二日ヨリ於東ノ原聖堂就御建立夫丸入方覚」によれば、多久聖廟の建設は宝永二年（一七

〇五）十月に着工し、同五年（一七〇八）八月に約三年で完成した。（『多久市史』第二巻）

『聖廟資料』「覚」50・52には年代が記されていないが八月二十七日（天候によっては二十八日）に棟上げを行うとの記述がある。

一、聖堂棟上之儀、廿七日吉日之由候条、右廿七日可然由候、若風雨抔之節は廿八日たるべき由之事

『多久市史』二巻では棟上げを宝永三年と推測している。この間宝永二年十一月～宝永四年八月まで日記が欠如しているので正確な年はわからない。着工から十か月ほどで棟上げを行い、その後大工仕事、内装工事に二年程かかったとの推測はおおむね妥当であろう。

宝永五年「御屋形日記」八月十二日の条には、聖廟の建立が成就し、十四日に孔子像を遷座して釈菜を執り行うと記されている。

一　聖堂一通り御建立御成就御座候付に付、十四日聖像を聖堂江御遷座并二釈菜御座候、此一通御仕組有之此節（以下略）

この聖像とは言うまでもなく中村惕斎に発注し自安宅兼学問所の「しつらい所」に安置されていた孔子像である。この釈菜には実松元琳や武富咸亮も出席している。

『聖廟資料』49「覚」には、年代が記されていないが、八月の中丁の日が十四日にあたるので、その日に「御遷座」することが決まったとある。これは前にあげた「御屋形日記」の宝永五年八月十四日の聖廟落成と釈菜・聖像の遷座に関する記述と一致する。『聖廟資料』49「覚」の記述は内容からおそらく釈菜・御遷座がせまった宝永五年七月中に書かれたものと思われる。

以下、「覚」の内容を紹介する。

覚

一、八月中丁十四日二相当り候故、十四日之御遷座二相極候事

なぜこの日に遷座と釈菜を行うのかであるが、釈奠の日は大宝律令学令においては、毎年春秋二仲（すなわち、春と秋の真中の月である二月と八月）の上丁の日（上旬の丁の日）に行うことが規定されていた。江戸幕府将軍が出席する湯島聖堂の釈奠も二月と八月の丁の日に行われており、近世多久聖廟の釈菜も同じくであった。近世では儀礼の内容は「釈菜儀節」に従っている。孔子像が来てから聖廟が出来上がるまでの期間、則ち茂文がはじめ清国から孔子像を取り寄せた元禄五年ごろ、あるいは中村惕斎に発注した孔子像が東原庠舎兼自庵宅の仮廟所に安置された元禄十四年九月七日以降に多久で釈菜・釈奠が行われていたかは定かではなく、その記録もない。この時点での聖廟建設の進捗状況については、次回引き続き「覚」の記述を読んでいく。

（以下　次号に続く）

聖廟資料49「覚」の一部

ふるさとの石碑　４　管鮑會百周年記念碑

公益財団法人 孔子の里　理事　服部政昭

明治維新によって東原庠舎は廃校となる

邑校東原庠舎は、元禄十二年（一六九九）に多久邑主多久茂文が創立した学問所で、別名鶴山書院と称し、邑内の百姓・町人にも門戸を開き、肥前文学の淵源と呼ばれて百七十年間続いた。維新の混乱、戊辰戦争従軍からの帰藩、大配分の版籍奉還、藩政改革などで、郷学の多くが休止の状態であったと思われるが、明治二年十二月に「郷学校」と改称する旨の布達が藩政府から出ると、多久家では早速、同年中に、佐賀藩多久郷学校小幹事に徳永鉉（字、鼎郷）が選任され、教導には草場立太郎（船山）が選ばれた。明治四年の廃藩置県によって、当然のことながら藩立の学校は廃止され、公立の「多久小学校」と改称され、明治七年（一八七四）一月には、「知新小学校」となり、初代の校長には、戊辰戦争で奥羽に出陣、凱旋後、多久茂族の近習兼侍講となった前東原庠舎副教授の須藤忠模が就任した。

知新小学校の校銘板

田上綽俊（たがみ　しゃくしゅん）の帰郷

明治十三年に教育令が改正されると多久郷の有志の者達は、丹邱義學を興し、丹波国馬路村の致遠館小学校で校長、京都聖護院で家塾、能登七尾で本願寺教員として漢学の教授をしていた元東原庠舎副教授の田上綽俊を推挙して、教授となし、明治十四年から二十五年まで、多久小学校の二代目校長としている。田上は、丹邱義學の教授として尽力する傍ら私塾「卯須舎」を開き、子弟教育に専念し多くの人材を輩出した。前任地の丹波でも、立命館大学の創始者・中川小十郎を育てるなど教育者として優れた才能を発揮している。

田上綽俊
（立命館史資料センター所蔵）

多久小学校で田上の教えを受けた御厨規三は、田上塾の先輩・江副貫之等数人と相諮って、椋の瀬橋畔りにあった吉野家・武力屋の楼上で「管鮑會」の発足式を行った。多久村内で生まれ、多久で育った者が共に助け合い、切磋琢磨して学び、旧制中学以上の学校へ入学した者は全てが管鮑會に入会し、後輩の進学や就職の世話をする。学問を奨励し、人材を育成し、多久村の発展に多大な影響をあたえた。百周年記念誌には、会員五百六十七名もの多久の秀才の名前が残されている。

なお、多久町の管鮑會に倣って、南多久に「南明会」、北多久に「北拷会」、西多久に「幡船会」が設けられていたが終戦とともに消失してしまっている。

管鮑會の創立者　草場佩川の曾孫・御厨規三（みくりや　のりぞう）

明治十二年（1879）～昭和十六年（1941）

草場佩川の長女・千賀は、多久藩士御厨忠次に嫁ぐ。その嫡子利貞の長男として多久町に生まれた御厨規三は、多久小学校で学び、田上塾で教えを受け、旧制佐賀中学、第五高等学校から東京帝国大学独法科を卒業。警視庁警部、台湾総督府警視、台湾総督府専売局煙草課長、南投庁長、高尾州内務部長、を歴任。大正十一年、三重県津市長に選任され、大正十四年まで在任した。翌年には、東京市社会局長に就任し、昭和三年まで在任した。昭和五年に長崎県佐世保市長に選出され、昭和九年まで務めた。

御厨規三

その他、佐賀藩士、石井亮一が設立した知的障害者施設「滝乃川学園」の常務理事を務めた。

【参考文献】
『佐賀県教育史　第四巻　通史編(1)』
平成三年三月三〇日　佐賀県教育史編纂委員会発行
『管鮑會誌（御厨規三氏追悼號）』　昭和十六年十二月
『100周年記念会誌　管鮑』　1995　平成七年

管鮑會生誕地碑

【碑文】

中国漢代の歴史書史記に管鮑の交わりという有名な美談があり明治二十九年八月会名を管鮑会と称し御厨規三先生により創会され郷土の発展と人材の育成会員の相互扶助を理念とし母校現中部小学校を集合研修場所として運営今日百周年を迎え後輩諸君の愛郷心の一助ならんことを願いこの縁故の地校庭の一隅に管鮑会の事績を後世に伝えるべく建立する

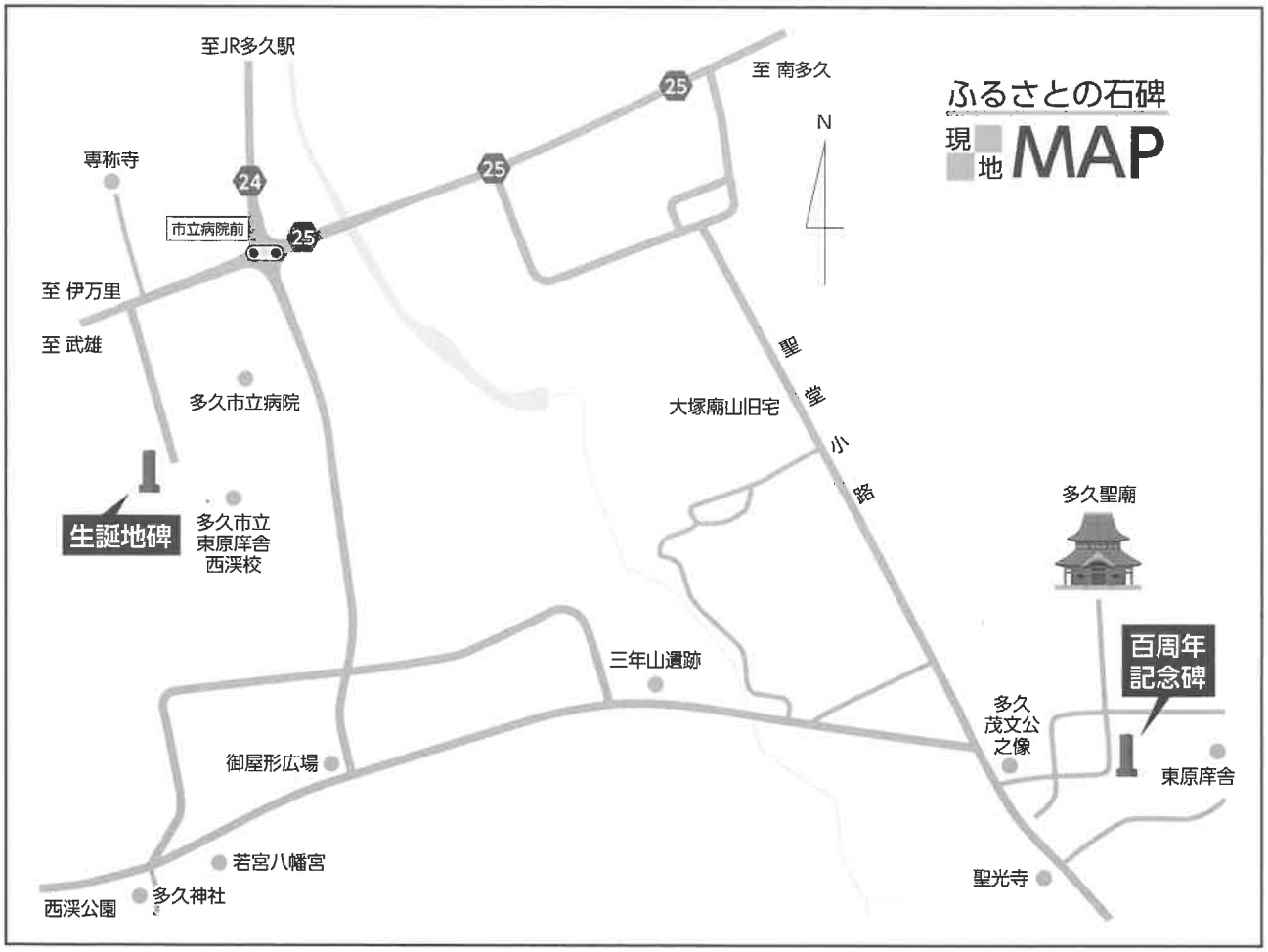
平成七年八月建立

管鮑會百周年記念碑

【碑文】

中国漢代の歴史書史記に管鮑の交わりという有名な美談があり明治二十九年八月会名を管鮑会と称し御厨規三先生により創会され郷土の発展と人材の育成会員相互の扶助を理念として運営今日百周年を迎える先生は田上綽俊先生の門下生で田上先生は邑庠東原庠舎の教職に任し心を学事に尽力され後私塾を開き子弟を教養されるその縁故の地に管鮑會の事績を後世に伝えるべく記念碑を建立する

平成七年八月建立



来訪・来信・雑録

10月1日　鶴山塾「古文書を学ぶ（入門）⑤」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
10月1日　鶴山塾「中国古典の扉⑤」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
10月5日　たく市民大学ゆい工房　岸川まんじゅう屋さん
（講師：森さとみ　シャンボール代表）
10月8日　多久聖廟周辺合同美化活動
10月15日　鶴山塾「古文書に親しむ⑤」
（講師：山口佐和子　多久市郷土資料館学芸員）
10月15日　鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
『「遺香堂繪像水滸傳」にみる水滸伝の世界』
（講師：志佐喜栄　多久市郷土資料館学芸員）
10月17日　秋季釈菜学校関係者事前練習
10月17日　秋季釈菜総練習
10月23日　令和４年秋季釈菜
10月28日　峯晋九州龍谷短期大学教授ほか来訪
11月1日、2日、4日　有田町同朋保育園来訪（論語素読）
11月5日　鶴山塾「中国古典の扉⑥」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
11月12日　鶴山塾「古文書を学ぶ（入門）⑥」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
11月8日　㈱ＪＡ食糧さが合格祈願「縁起米」奉納式
11月19日　鶴山塾「古文書に親しむ⑥」
（講師：山口佐和子　多久市郷土資料館学芸員）
11月19日　鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
『草場佩川と鹿島　～文事が繋ぐ交流～』
（講師：高橋研一　鹿島市民図書館学芸員）
11月26日　全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式、記念講演会
12月3日　鶴山塾「古文書を学ぶ（入門）⑦」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
12月3日　鶴山塾「中国古典の扉⑦」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
12月7日　ゆい工房「本格蕎麦打ち」（後期）
（講師：岸川和則　塩田津ソバの会）
12月17日　鶴山塾「古文書に親しむ⑦」
（講師：山口佐和子　多久市郷土資料館学芸員）
12月15日　多久聖廟イルミネーション点灯式
12月28日　執務収め式
12月31日　多久聖廟お火たき
1月4日　多久市新年の集い（天山多久温泉ＴＡＱＵＡ）
1月7日　鶴山塾「古文書を学ぶ（入門）⑧」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
1月7日　鶴山塾「中国古典の扉⑧」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
1月9日　第１回多久聖廟絵馬奉納式（多久市観光協会）
1月21日　鶴山塾「古文書に親しむ⑧」
（講師：山口佐和子　多久市郷土資料館学芸員）
1月28日　鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」『戊辰戦争と多久』
（講師：芳野貴典　佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員）
2月4日　鶴山塾「古文書を学ぶ（入門）⑨」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
2月4日　鶴山塾「中国古典の扉⑨」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
2月11日　多久聖廟釈菜儀式体験
2月18日　鶴山塾「古文書に親しむ⑨」
（講師：山口佐和子　多久市郷土資料館学芸員）
2月23日　第２回多久聖廟絵馬奉納式（多久市観光協会）
3月1日　令和４年度第２回理事会
3月1日　第３回多久聖廟絵馬奉納式（多久市観光協会）
3月4日　早稲田佐賀高等学校
「早稲田の聖地さが　大隈重信一〇〇年ハイク」
3月4日　鶴山塾「古文書を学ぶ（入門）⑩」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
3月4日　鶴山塾「中国古典の扉⑩」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
3月11日　孔子の里ジュニアガイド市外研修（唐津市旧高取邸）
3月15日　東原庠舎消防訓練
3月17日　律桂軍中華人民共和国駐福岡総領事ほか来訪
3月22日　令和４年度第１回臨時評議員会
3月28日　令和５年春季釈菜委員会

令和五年　春季釈菜

日時：令和５年４月18日（火）
場所：多久聖廟
執事・伶人 入場　午前10時～
献官・祭官 入場　午前10時20分～
釈菜（せきさい）　午前10時30分～11時30分

編集後記

コロナ禍で３年ぶりの実施となった孔子の里ジュニアガイド市外研修会。今回の研修先は、唐津市にある「旧高取邸」。高取伊好翁の精神が色濃く残る屋敷を見学し多くのものを感じ取るとともに、ガイドとしての心得を改めて学ぶことができたようです。

高取翁は、多久に生まれ、東原庠舎で学びました。数々の炭砿経営を経て石炭王として成功し巨額の富を得ましたが、終生にわたって社会事業や産業振興に多額の寄付を寄せるなど、地域社会や福祉の発展に尽くすことを使命とされていました。また、漢詩を能くし、文化や芸術に造詣が深い文化人でもありました。

旧高取邸は、和風を基調としながら洋間をあわせ持つという近代和風建築の特色を備える一方、大広間には能舞台を設けるなど独特のつくりになっています。詳しくは、本号6、7ページで松浦史談会の田島龍太事務局長に紹介いただいています。

自粛や制限を余儀なくされてきた社会活動も、感染防止に配慮しながら平常の取り組みを進める春を迎えました。多久聖廟を訪れる人々が増え、学習と経験を積んでガイドに励む子供たちの活動がさらに充実することを願っています。（ほ）

西渓公園　高取伊好像